

現場から環境倫理を考える



明治40年、岩手県宮古市津軽石川のサケ漁。人びとが川に敬意を払い、地域文化にサケを位置付けるその背景は実は複雑である。歴史的に作られてきた価値や表象の空間を読み解きながら、100年の計を地元の人びとと共に考え、実践を作り出すのが環境社会学である。同時にこのような営みは、人びとが社会の中でどのように科学技術の解と社会的な解を一致させようとしてきたかもまた、教えてくれる。

生きられた空間と人びと

川遊びの達人という方はい、ガサガサが得意である。もとい、一家言もつ。ガサガサとは、文字通り、川岸の茂み、大きな石の下をガサガサと足でにぎやかし、水流と地形に注意してタモ網をしかるべきところに差しこむと、魚、エビ、水生昆虫など川に住む生き物がとれる。

いっしょにガサガサをしなから、その人の人生やその中でどの川との関わり、遊びの内容、誰と一緒に遊んだか、誰から何を教わったか、あるいは誰の背中を見たか、地域の大人たちの仕事は何か、というのを聞いていく。

釣りについていくこともあれば、農作業、森の手入れ、狩猟の場所に連れて行ってもらうこともある。あるいは軒先での井戸端会議に混じり、夕方の浜をみながらお話を伺うこともある。

話をしてくださっている方の雰囲気、話がなされている場、その人の所作、表情。不意に訪ねてくる人、時間と共に変わる空や風の様子。調査者との対話の中で出てくるそのようなものを伴う「語り」を、他のいくつかの物語との関わりをみながら、いくつも重ねていくと、その人が抱えている複数の価値の所在が見えてくる。そしてその人の生きる空間そのものが見えてくる。同時に、環境と人のあ

いだの、切り離せない複雑な問題群の結び目も見えてくる。

価値の時空と空間の共有

誰しも人は複数の価値の中に生き、人びとがある行為を選択した背景にどのような価値があるのかも、単線的にはつなぐことができない。環境と人の関わりについて、果たして私たちはどのように考えるのか。それはこの環境の中でどう生きるのか、という人びとの生と結びつくものであり、自分の後に生を受ける人びとに託すに足る世界（＝環境）を私たちは作れているか、という問いでもある。

これらの問いに答えるには、技術的な解ではなく、社会的な解を得ようとしなければならない。人びとの間の価値の語彙を増やし、その価値の時空を描き、人びとの生き方の幅（福祉）と環境の議論をつなぐことが求められる。同時に、共有しうる価値の創出や、あるいは日常の中の人びとの選択がどのように構造化された中にあるのか、システム自体を著述しつつ、新たな展開を生み出す社会実験を人びとと試みなくてはならない。

私はこの課題について、米国立リフォルニアと岩手県宮古市の事例から、特にサケのいる流域と人びとの関わりを軸に研究を進めてきた。震災後、その意味の重さを改めて感じる日々である。

Mayumi FUKUNAGA

●1976年愛媛県生まれ。津田塾大学文学部卒業、東京大学大学院新領域創成科学研究科修士（環境学博士）。専門は環境社会学と環境倫理。大阪府立大学を経て東京大学大学院新領域創成科学研究科に所属。